

「まかる」その後

——中世前期の用法——

田村忠士

いわゆる謙譲語としての「まかる」の性格用法については、先に平安文学研究(六十七輯・宇津保物語の用例から見た動詞「まかる」の用法)誌上で、私なりの考察解明を試みた。その結果を次に示す。

「まかる」は元来「上位者の命によって行く」という意味を持つ被支配待遇の語であった。それが、中古に入るとほぼ会話文専用の言葉となり、「上位者(聞き手)の命により」あるいは「上位者(聞き手)の許しを得て」という気持から「行く」の意の丁寧の意を表わすようになった。と同時に、この語を接頭語として用いることによって下接する種々の動作をへりくだってという用法も生じた。右をまとめると、

- (1) 上位者の命によって他所に赴く。
- (2) 口頭語であり、単独で用いられて「行く」の丁寧語となる。
- (3) 口頭語であり、接頭語として用いられて自己卑下の気持を表わす。

ただ、(3)については次のような条件が必要である。一つは男性専用語であること。二つには「まかり出づ」のばあい、上代からの謙譲語としての用法と中古において発生した丁寧語の用法の両者を区別する必要があることである。

本稿はこうした中古の用法が中世前期(鎌倉時代を対象とする)

においてはどのようなようであったかを明かにするのがねらいである。

まず(1)については中世(厳密に言えば中世前期であるが、便宜的に以下このように称する)には全く見られない。それはこの用法が本来的なものであり、従って古いものであることを意味する。中古においても竹取物語・宇津保物語に数例を見るのみである。

次に(2)については、中古とほぼ変わりがない。ただ最も異なる点は地の文における用例が散見されるようになることである。それらは撰集抄・発心集・閑居友・愚管抄・古今著聞集・徒然草などである。

① 以往、あづまのかたへさそらへまかり侍り。(撰集抄Ⅱ岩波文庫・四二頁)

② その比、東山より安居院辺へ罷り侍りに、四条よりかみさまの人、皆北をさして走る。(徒然草Ⅱ大系本・一三〇頁)

こうした事実は、一見「まかる」が文章語化したかに考えられるが、右に掲げた作品には全て地の文に「侍り」が現われていることを見逃してはならない。諸説はあるが、これらの作品に用いられる「侍り」を口頭語と認めるならば、「まかる」も口頭語として認めるべきであろう。と同時に同じ被支配待遇語として成立した「侍り」と性格的に類似していることが言えよう。このことはすでに前稿に

おいて指摘したことであるが、「まかる」に「侍り」が下接するところが中世においても、「まかる」総数に対してわずか六パーセント弱ですこぶる稀れな点からも言える。「侍り」に接続助詞「て」を介する表現では六パーセント強とやや前者を上回るものの大した違いはない。

「まかる」に「候ふ」の下接する例はすでに今昔物語に数例見られたが、当代でも用例は少く、

③ 昨日の焼亡に、醍醐に候所にまかり候て、はせまゐらず候。

(古今著聞集Ⅱ大系本・四四五)

のほか、宇治拾遺物語に二例を見るのみである。

なお、「まかる」単独の用法は時代が下がるとともに用いられなくなる傾向があり、保元物語では皆無、覚一本平家物語では接頭語の用法四十三に対して七例しか用いられていない。この現象は、まだ確認していないが、「参る」の侵出によるものと考えられる。

次に③の用法について述べる。私はこれを「まかる」の接頭語的用法としたが、複合語と見る説もある。けれども、決して複合語のそれでないことは、「まかる」が実質的意義を持たないことから明白である。ただ、

④ このうへの山におをきたる岩屋の侍にまかりなんこもりぬる。

(閑居友Ⅱ中世の文学・九三)

などから見れば「まかり」が「行く」の意を持つとしてよいかに見えるが、孤例であり後者の説を支持するには不十分と言つてよいであらう。

また、次のような、

⑤ としごろ申なれたる人の、伏見に住むときとて、たづね罷りたりけるに、庭のくさ道の見えぬほどに茂りて、虫の鳴きければ (山家集Ⅱ大系本・四四四番歌詞書)

⑥ ひとり見をきて、帰り罷りなんずるところ哀れに、何時か都へは帰るべき、など申しければ (同・一〇九八番歌詞書)

動詞に下接する「まかる」をこの用法に入れるむきもある。「まかる」を複合語とする観点に立てばこうした見方も可能であるが、この場合「まかる」は形式化してはいるものの「行く」の意の実質的意義は有しているのであり、単独用法とすべきである。中世では右のほか「出づ」「歩む」「成る」「移る」「衰ふ」「為」「失す」「現はる」「作る」などに接し、中古に比べて上接語も多くなっており、形式化が次第に強くなっている。

接頭語「まかる」に下接する動詞を、中古との対比のうえで表にしたものが次表である。

(次頁表参照)

これによると、下接する動詞は中古五十語に対し中世は二十七、そのうち二つは中世のみ存するから、中世における下接動詞は中古の丁度半分となる。このことは接頭語としての用法が中古では非常に自由であったのに対して、中世ではやや固定化していったことの現われであらう。中世のみの用法は次の二例である。

⑦ 日本の人は、いかにもわが身をばなきになして、(虎にまかりあへば、よき事も候めり。(宇治拾遺物語Ⅱ大系本・三四九)

⑧ これは日比白山に侍つるが、みたけへ参りて、いま二千日候

下接動詞	中古	中世	下接動詞	中古	中世
会 ぶ	○	○	立 つ	○	○
合 ぶ		○	絶 ゆ	○	
あ かる	○		着 く	○	○
当 たる	○	○	問 ぶ	○	
預 かる		○	通 る	○	○
余 る	○		止 る	○	○
ありく	○	○	止 まる	○	○
至 る	○		訪 ぶ	○	
出 づ	○	○	流 さる	○	
出で立つ	○		成 る	○	○
入 る	○	○	馴 る	○	
要 る	○		逃 ぐ	○	
浮 かぶ	○		退 く	○	○
失 す	○		上 る	○	○
移 る	○		乗 る	○	
遅 る	○	○	離 る	○	
起 こる	○		負 く	○	
降 る	○	○	向 かぶ	○	○
老 ゆ	○	○	休 む	○	
帰 る	○	○	宿 る	○	
隠 る	○	○	行 く	○	
通 ぶ	○		寄 る	○	○
下 る	○	○	別 る	○	
籠 る	○	○	渡 たす	○	
去 る	○	○	渡 る	○	○
過 ぐ	○	○			
過 ぐす	○		語 数	50	27

はんと仕候つるが、齋料つきて侍り。まかりあづからんと申あげ給へ。(同・六〇べ)

この接頭語の用法において特に注意すべきは「まかり出づ」のばあいである。前稿においてすでに指摘したように、これにはいわゆる謙讓語のばあい(したがって地の文にも用いられ、尊敬語「給ふ」が下接することもある)と、被支配待遇語のばあいがある。

⑨ 齋宮女御、はるのころまかりいでて、ひさうまゐり侍らざり

ければ(新古今和歌集Ⅱ大系本・一四一六番歌詞書)は前者であり、

⑩ 西行法師、山里よりまかりいでて、「むかし出家し侍りしその月日にあたりて侍る」など申したりける返事に(同・一七八二番歌詞書)

は後者である。前者の例はすでに万葉集に見えており、そこに(1)と同じ用法を見るべきであろう。つまり、この場合の「まかる」は、「任務を帯びて」あるいは「貴人の許しのもとに」他所に赴くという実質的意義があるのであり、その点において接頭語の用法と異なるのである。

中世には右のほか、「まかり立つ」に同様な用法が見られる。

⑪ 「……」と勅定ありければ、いなみ申べき事なくて、即罷立ちて、弓矢を取て参たりけり。(古今著聞集・二八一ペ)

⑫ 女院ノ、「大納言道長ニ太政官文書ハ奏セヨト、トクオホセクダセ」ト仰ラレケレバ、俊賢タカクキセウシテマカリタチテ、ヤガテ仰下ケレバ……。 (愚管抄Ⅱ大系本・一七一ペ)

これらはいずれも地の文に用いられており、(3)の用法とは違ったものである。この語は中古では

⑬ 家に行平朝臣まうできたりけるに、月のおもしろかりけるに、さけらなどたうべてまかりたゝむとしけるほどに(後撰和歌集Ⅱ後撰和歌集総索引・一〇八二番歌詞書)

⑭ 大覚寺に入々あまたまかりたちけるにふるき滝をよみ侍りける(拾遺和歌集Ⅱ国歌大観・四四九番歌詞書)

のごときのと、
⑮ 兼輔朝臣、左近少将に侍ける時むさしの御むまむかへにまかり立つ日、にはかにさはることありて……。 (後撰和歌集・三六七番歌詞書)

のようなものがある。前者は被支配待遇のものと解されるが、後者は先の⑪・⑫の例と同様に考えてよい。次の

⑯ (内侍の典侍)仲忠 まかりたちなん。いましもさぶらはゞ、又きこえずくしもし侍。(宇津保物語Ⅱ宇津保物語本文と索引・本文編・一〇一四ペ)

⑰ 暫許有レバ、兼時、(守に)「白地ニ罷立ツ」ト云テ、忿テ走ル様ニテ行ヌ。(今昔物語集Ⅱ大系本・⑤・六六ペ)

などは両様に解される。こうした中古の状況と中世の状況および平家物語の四例がすべて地の文に用いられていることを合わせ考えると次のように言えるであろう。「まかり立つ」にも「まかり出づ」と同様に謙譲語の用法と被支配待遇語との用法があったと。前稿をこのように訂正したい。

最後に下接する動詞について述べる。下接する動詞は自動詞がほとんどであること、ただ今昔物語集では「過ごす」・「渡たす」の二語において他動詞の用例のあることは前稿において述べたところである。中世もこうした傾向は変わらず、表で見る通り他動詞は用いられていない。前稿で触れなかった、

⑱ 今はかくて都離れて知らぬ世界にまかり流されて、又かやうに無御影にも御覽せらるゝやうも侍らじ。(栄花物語Ⅱ大系本・上・一六五ペ)

については、「流す」という他動詞に付いたと見るよりは、「流さる」に付いたと見る方が自然であろう。

以上まとまりのないままに書き流して来たが、中世後期の「まかる」の用法については次のようにまとめられよう。

1、単独用法の「まかる」は中古とほぼ変わらないが、接頭語の用法に比して次第に減少する傾向がある。

2、接頭語としての用法は、中古に比べて固定化する傾向にある。
3、「まかり立つ」にも謙譲語のばあいと被支配待遇語のばあいがある。

4、下接する動詞は自動詞がほとんどを占めるが、その傾向は中古とほぼ変わらない。(山口県立岩国高等学校教諭)